

あとがき

あとがき(后记)

宇都宮大学 HANDS プロジェクトは、昨年度平成25年度より、「北関東を対象とした外国人児童生徒支援のための地域連携事業」として新たな3年間のスタートを切りました。今年度の成果の1つとして、『中学教科単語帳』(日本語⇄中国語)をお届けします。翻訳者 倪小棠さん、監訳者 張京花さん、コーディネーター 船山千恵さんの献身的な尽力と見事なチームワークのおかげで、当初の計画通り、年内に刊行することが出来ました。まずは、3名に深く感謝申し上げます。

倪小棠さんとは初めてお会いしましたが、いろいろなことを詳しく調べて確認しながら、1つ1つ丁寧に翻訳していることが伝わってきました。張京花さんは僕の研究室で大学院博士前期課程を修了した人で、現在、翻訳家として活躍しています。今年、共訳書として、『中国絵画の精髓』(科学出版社東京)を出版しています。今回の中国語版は、船山さんが編集した4冊目の単語帳となります。スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語、そして中国語。単語帳の歴史がまた1つ加わりました。

ところで、この紙面を使って、国際学部の現状について少し語らせてください。というのは、今年国際学部が創立されてから20年目を迎える記念すべき年だからです。国際学部は平成4年10月に創立され、翌5年の4月から学生を受け入れ始めました。国際学部は小さな学部ですが、これまでに2千名を超える卒業生を社会に送り出しています。大学院の修了生は400名を超えています。「塵も積もれば山となる」というところでしょうか。

学部創立20周年を記念して、下野新聞社より『世界を見るための38講』という本を出版しました(下野新聞新書)。国際学部並びに国際学部と関連が深い留学生・国際交流センターの教員38人がそれぞれの「教育と研究に関するエッセイ」を書いています。そして、国際学部が独自の理念に基づいて進めている6つのプロジェクトがコラムで紹介されています。もちろん、HANDSも課題解決型のプロジェクトとして紹介されています。また、学部20年、大学院15年の歩みを分かりやすく伝える記念誌『国際学部20年、国際学研究科15年の歩み』も刊行しました。さらに、旺文社の受験雑誌『蛍雪時代』12月号には「国際学部の魅力って何?」(学部長インタビュー)という特集が3頁に渡って掲載されています。

HANDSが刊行してきた単語帳を使って日本語を学び、『世界を見るための38講』を読んで勉強し、記念誌と蛍雪時代を見て「小さいけれども元気がよくてパワフルな国際学部」にイメージを膨らませ、意欲満々で国際学部の門を叩く、そんな外国人児童生徒が出てくることを想像すると、胸が高まります。

では、次の単語帳の刊行を含むHANDSの前進と「学部創立30周年」のために、また一歩を踏み出したいと思えます。謝謝! 大家等你来!

宇都宮大学HANDSプロジェクト代表
宇都宮大学国際学部長
田巻 松雄